

（論文）

# Volkstümliche Musik とは何か

押 野 洋

## I はじめに

日本とドイツの戦後（第二次世界大戦）のポピュラー音楽の変遷を見てゆくと興味深い事にある時期まで相似形をなしていることが分かる<sup>(1)</sup>。もっとも、ともに敗戦国であり戦後は戦勝国（西ドイツに限れば米英仏）の占領期を経て経済大国に発展し、風俗・文化でも英語圏の影響を大きく受けているという共通点を考えれば、ポピュラー音楽史がともにある程度似通っているのも不思議ではないと言えるのかもしれない。ただし、その変遷の中でドイツ及びドイツ語圏の国々にあつて日本にはないジャンルの音楽も当然ながら存在する。それが Volkstümliche Musik（以下、Vtüm と略記）なのである。本稿はドイツのポピュラー音楽における Vtüm の位置を探るものである。このジャンル用語には適切な日本語訳が見つからない<sup>(2)</sup>のだが、このことがまさにそれに対応するジャンルが日本に不在であることを証している。以下、ドイツ語圏のポピュラー音楽内で隣接するジャンルである Volksmusik（以下 VM と略記）と Schlager を引き合いに出しながら Vtüm の歴史を辿ると同時に、その輪郭を探ってみたい。次に、これらのジャンルを含めたポピュラー音楽全般が現在、ドイツではどのように受容されているのかを音楽市場における CD シングル・アルバムという観点から見てみたい。更に、この Vtüm の特殊性を浮き彫りにするために、テレビ番組や祭りを取り上げてみることにする。このような Vtüm の媒体を調べる事でこの分野の音楽の特徴が一層掴めるのではと考えるからである。

尚、本論に入る前に、Vtüm を語る際の厄介な問題に触れておく。それはこの Vtüm と VM という名称がしばしば意図的に混同して用いられているということである。この混同は、特にテレビ番組や雑誌、それに CD アルバムのタイトル<sup>(3)</sup>に顕著である。二つのジャンルを明確に区別するために最近では VM の前に「真の、本物の」という意味の形容詞「echt」や「wahr」を加えた echte Volksmusik, wahre Volksmusik といった名称も使われるようになってきている<sup>(4)</sup>。両者の相違点については後述するが、ここでは VM という表記には場合によっては Vtüm も含まれることもあるが、Vtüm という名称には VM は含まれない、という点だけ記しておきたい。

## Ⅱ Vtüm 小史－VMと Schlager の間で

### 2-1 VM と Vtüm

「まえがき」で既に触れたようにVMとVtümは本来別なジャンルである。「VMは芸術音楽（Kunstmusik）とは異なり、民間伝承の音楽として口頭で（例えばヨーデル）、乃至聴覚的に（例えばダンス）受け継がれてきたものであり、それ故、少なくとも20世紀初頭までは教会音楽と並んで、教養の乏しい社会的下層の人々によって担われ、そして受容されてきた音楽である。（・・・）VMの曲の構造は習得と伝播の過程で絶えず変化を受けてきた。インストゥルメンタルで用いられたのはVMに特有の楽器であるバイオリン、アコーディオン、バグパイプ等であり、更に芸術音楽でも使われたクラリネット、ピアノ等であった」<sup>(5)</sup>。「VMは器楽と歌を典型とする音楽形態で、多くの場合、ある特定の地域の祭を通して発展してきたものである」<sup>(6)</sup>。「VMの歌詞の内容は、日々の生活から得られたもので、大抵、郷土とその風習に結びついたものである。陽気で明るく、ダンスが可能な音楽、更には瞑想的で、悲しげな歌もこのようにして作られてきたのである」<sup>(7)</sup>。要するに、VMは、特定の地域で、その土地の長い文化伝統の中で生まれてきた音楽であり、通常、祭の際に一般の人々（音楽家としては素人）により演奏されたり、その土地の言葉（方言）で歌われる土着の音楽である。それに対し、VtümはVMの要素を取り入れた商業的な音楽で、プロの歌手によって標準語で歌われるのが一般的である<sup>(8)</sup>。従って中にはVMとVtümの最大の相違点は商業的にVtümに関わってくる著作権だという演奏者もいる<sup>(9)</sup>。Vtümで用いられる楽器は、ギター、リュート、アコーディオン、トランペット、クラリネット、トロンボーン、バイオリンなどである。尚、VMでは、ギターでもエレクトリック・ギターやベースが用いられる事はない。

Vtümには歌詞のつかないインストゥルメンタルもある。「これには各地の民謡や踊りの音楽をはじめとして、ビアホールやワイン酒場の音楽、南部ドイツで盛んなブラスバンドによるマーチやポルカ、カーニヴァルの歌などが含まれる。その特徴は、単純明快な旋律、調子の良いリズム、それに、聴いていると浮かれ気分になるような根っからの陽気さ」<sup>(10)</sup>である。ドイツではブラス音楽は地域文化の重要な一翼を担っており、教会の祭り、地元の公的な催し物、あるいは個人的な祝い事でも楽団が演奏し、しかるべき音楽空間を構築しているのである<sup>(11)</sup>。ポピュラー音楽シーンで活躍したのは、スロベニア人のスラフコ・アフセニク（Slavko Avsenik, 1929- ）のオーバー・クライナー（Oberkrainer）楽団。彼は打楽器の代わりにチューバでリズムを刻む独特のスタイルを確立し、1955年の「トランペット・エコー（Trompetenecho）」でブレイク、この曲は現在ではVtümのエバーグリーンとなっている。彼らはこれまでに3700万枚のレコードやCDを売り上げたと言われている<sup>(12)</sup>。さらに「フォルクスムジック界のカラヤン」<sup>(13)</sup>とも称されたエルンスト・モッシュ（Ernst Mosch, 1925-1999）によって率いられたオリジナル・エーガーレンダー・ムジカンテン（Original Egerländer Musikanten）も1950～80年代に活躍した。彼らが得意としたのはボヘミア地方のポルカ、ワルツ、行進曲であった。ブラスムジックというジャンルはないのだが、この音楽の強みは、どんな歌でもクラシック曲でも演奏次第でブラスムジックに変換できるという点である。

## 2-2 Schlager と Vtüm

では次に Schlager との関連性を見てみよう。Schlager とは元来「商品」の謂いであり、商業化の中での産物であることが最初から暗示されている。日本で言えば「歌謡曲」に近い Schlager の様式の特徴を一言で言うとならば、「単純さ」となろう。歌詞もパターン化された文言・語句の寄せ集めであり、好んで用いられる単語は、恋愛 (Liebe)、幸福 (Glück)、心 (Herz)、世界 (Welt)、人生 (Leben)、夢 (Traum)、太陽 (Sonne)、空 (Himmel)<sup>(14)</sup>である。リズムもメロディーも複雑さとは縁遠く、曲の構成もリフレインを基本とする単純なものである。単純であるが故に多くの人々の心にストレートに届き、記憶にも残りやすいのであるが、同時に、単純であるために「深さ」を尊ぶドイツの知識人<sup>(15)</sup>からは一貫して軽視されてきたジャンルでもある。

Vtüm は Schlager の変種と見なす事ができる。その歌詞内容は、恋愛 (Liebe)、慰み (Trost)、上機嫌 (Stimmung)、日常の些細な出来事 (kleine Alltagsbegebenheiten)、幼年時代 (Kindheit)、友情 (Freundschaft) が主で、その歌は、異質さや脅威とは無縁で、信頼感、期待感を聴き手にもたらし、「郷土性 (Heimat)」という概念に集約できるものである<sup>(16)</sup>。つまり、Schlager の中でも郷土性 (Heimat) を殊に強調したものが Vtüm なのである。両ジャンルの境界線は流動的ではあるが、歌詞内容以外で両ジャンルを分ける表徴は、使用言語としての方言と衣装である。Vtüm も Schlager 同様、標準語で歌われるのが一般的ではあるが、時に方言が使われることもある。方言の使用に関して言えば、一曲全て方言で歌われることもあれば、一曲の中で方言と標準語が混在する歌もある。例を挙げれば、オリジナル・ナープタール・ドゥオ (Original Naabtal Duo) の「ババリアの女神 (Patrona Bavariae)」は、リフレインのところが標準語、それ以外は方言で歌われている。歌い手によっては、曲に応じて方言と標準語を使い分けていることもある。衣装に関して言えば、出身地の伝統的な衣装や類似の衣装—女性ではきっちりした胴衣とゆるやかなギャザースカートからなるダードゥル、男性では皮製の半ズボン—を身に着けている例もあれば、パトリック・リンドナー (Patrick Lindner, 1960-) のように他の Schlager 歌手同様、特別な衣装を身に着けない場合もある。常に同じ衣装で登場するのが中年男性7人組のカステルルーター・シュパッツェン (Kastelruther Spatzen)。彼らは、出身地である南チロル (北イタリア) の Kastelruth に昔から伝わっている祭りの衣装を身に纏っている。白シャツ、表が黒で裏が赤の刺繍入りベスト、赤を基調としたカラフルな布製スカーフ風ネクタイ、皮ズボンに皮製の長靴。この衣装は彼らのトレードマークであり、これにより郷土との結びつきが明示されているのである<sup>(17)</sup>。

さらに、Schlager と比較した場合の Vtüm の「郷土性」への傾斜はこの分野の歌い手にも見て取ることができる。『シュラーガー事典 (1993年)』と『Vtüm の辞典 (1999年)』<sup>(18)</sup>を調べてみると、ソロ歌手の割合は Schlager で 673 人(組)中 554 人で 82%、Vtüm では 240 人(組)の中 117 人でその割合は 49%となる。つまり Vtüm では半数はデュオやグループなのであるが、注目すべきは、その中でも夫婦デュオ、兄弟・姉妹デュオ、母娘(娘達)・父息子(息子達)からなるグループ、そして兄弟・姉妹を中心として構成されたグループがかなり多いという事実である。家族という絆を核としたグループは 123 組中 22%にあたる 27 組である。さらにグループ名にもある特徴が指摘できる。デュオやグループでは、個人名がついたケースが 123 中 31 で 22%であるのに対し、村や町、山、谷、川等の名称からのネーミングが 41%

(123中50)と非常に多いことである。一例を挙げれば、オーストリアのチロル州にある「ツィラー谷 (Zillertal)」という名前のついたグループは先の事典には4組も見出すことができる<sup>(19)</sup>。Vtümはグループ名からして地縁・類縁という郷土に根ざした結びつきを色濃く漂わせているのである。

ところで、Vtümがジャンルとして固定し、一般に知られるようになったのは1980年代半ば以降であるが、先述のプラス音楽の様に、それ以前からこのタイプの音楽は存在していたのである。以下に、VMとSchlagerの中間に位置するような例を挙げてみたい。

### 2-2-1 VMとVtümの間、フィシャー・コーラス団

日本で有名なドイツ語圏の合唱団には、ウイーン少年合唱団、ドイツではライブツィヒの聖トーマス合唱団、レーゲンスブルク大聖堂少年合唱団等がある。これらはいずれも宮廷や教会附属の聖歌隊であり、教会や礼拝堂でのミサ曲の演奏が本来の任務である。世俗的な合唱団はドイツでは歴史が古く、19世紀には男性合唱団が結成され、1862年にはコーラスグループが集まってドイツ合唱連盟の下に組織化されていた<sup>(20)</sup>。当時、会員は専ら男性のみで政治色の強いものであった。この傾向はナチスの時代まで続くことになる。1950年代になるとドイツの伝統的な歌からの若者離れが進み、若者の抗議運動が激化した1960年代後半になると伝統歌は嘲笑の対象となっていった。このあたりの事情はシュラーガーの場合と軌を一にしている。このような状況下で、自ら「ドイツ・フォルクスリート」を任じて、精力的にコーラス活動の場を広げていったのが、ゴットヒルフ・フィッシャー (Gotthilf Fischer, 1928-) である。彼は、18歳で初めて地元のコーラスの指揮者となり、34歳で「ホルストと歌おう」というテレビのコーラス番組で指揮者デビュー。素人集団であるフィッシャー合唱団を率いてブレイクするのが41歳の時であり、18、19世紀のフォルクスリートを多く取り上げている。彼の特徴は企画力にあり、大きなイベントで大掛かりな合唱を幾つも成功させている。例えば、1974年のサッカー・ワールドカップ・ドイツ大会のミュンヘンでの決勝戦での1500人の大コーラス。このときは、ドイツシュラーガー界の大物であるフレディ・クヴァイン (Freddy Quinn, 1931-) と「大勝負 (Das große Spiel)」を歌った。1974年インスブルック冬季オリンピック大会にも合唱団とともに参加。1978年にはアメリカはワシントンの平和ミサに参加し、時の大統領ジミー・カーターに自作の歌を捧げている。1986年にはローマのヨハネ・パウロ2世のミサに合唱団として招かれている。あろうことか2001年には、伝統的なドイツのフォルクスリートの代表としてベルリンのテクノの祭典、ラブ・パレードにも参加している<sup>(21)</sup>。このようなイベント参加以外にも、合唱団とともに数多くのテレビ・ラジオ番組に出演し、数多くのレコードやCDを出している。そして、現在では90分の「歌の街道 (Strasse der Lieder)」という自分のテレビ番組を持っている。これは、1992年に始まり、「黒い森」「ボーデン湖」「ネッカー河畔」「チロル」といった一つの観光地の街道を、コーラスのメンバーを乗せた旧型のボンネットバスが走り、途中下車しながらその土地の歴史、名所旧跡、地元の料理、飲み物、さらには地元出身の各界の著名人が紹介され、その合間に歌が披露されるという趣向の番組である。この番組はドイツ語圏の観光ルートの紹介の趣を備えている。

2007年度から公共放送のZDF (ドイツ第2テレビ) で、コーラス・グランプリ大会が開催されているが<sup>(22)</sup>、この大会にG・フィッシャーが関与しているのは言うまでもない。

現在、ドイツ合唱連盟 (Deutscher ChorVerband) は賛助会員を含めて100万人の会員を擁し、その内の75万人が2万7千の合唱団で音楽活動をしている。子どもを含めた26歳以下の若者は10万人で3千の児童・少年少女合唱団で活動している<sup>(23)</sup>。確かにコーラス活動をしている児童や青少年の割合は高いとは言えないが、彼らはコーラスを通してVMやVtümに触れているのである。

## 2-2-2 Schlager と Vtüm の間、ハイノ

Schlager と Vtüm を架橋する役割を担ったのが、郷土の美しい自然をバリトンで朗々と歌い上げるハイノ (Heino, 1938-) であった。連想ゲームではないが、ドイツ人にブロンズの髪と黒のサングラスという二つのヒントだけからイメージする人物を尋ねれば間違いなくハイノの名前が挙がってくるはずである。彼がレコードデビューしたのが1966年。B面の「谷の彼方 (Jenseits des Tales)」が10万枚のヒット、翌67年初頭に発売された第二作「色鮮やかな旗がなびくとき (Wenn die bunten Fahnen wehen)」は20万枚を超える売り上げを記録する。同67年夏の三作目の「嵐を愛する (Wir lieben die Stürme)」は更に25万枚を超える大ヒットとなった。デビュー曲から三作連続でヒットを記録したのは1960年代ではハイノ以外ロイ・ブレック (Roy Black, 1943-1991) だけである。ハイノのこの成功がいかに反時代的だったかは、当時の西ドイツの政治・社会状況を振り返れば一目瞭然である。「奇跡の経済復興」を謳歌していた西ドイツも1960年代半ば、初の景気後退を迎え、1966年にはキリスト教民主同盟 (CDU)・キリスト教社会同盟 (CSU) と社会民主党 (SPD) の保守・革新の大連立政権が誕生する。しかしこの大連立は安定を生むどころか反対に騒乱を引き起こした。野党不在の大連立政権下、政治に敏感な若者たちが中心となって議会外反対勢力 (APO) に結集し、この反体制運動は69年のブランド政権誕生にも大きく寄与することになった。さらにより大きな文脈で言えば、世界の各地で同時多発的な68年革命といわれる若い世代の抗議運動となって、西ドイツの古い体質を根底から変えていったのである。政治と変革というこのコンテクストの中にハイノを置けば彼の反動性は明瞭であろう。実際、ハイノは左派陣営から揶揄されたが、それに対し、当時彼のマネージャーであったハンス・R・バイアーライン (Hans R. Beierlein, 1929-) は、あるアンケート結果を持ち出して、「ハイノのファンの68%は社会民主党を支持し、74%は労働組合員である」と言明して左派からの攻撃を封じ込めたのである<sup>(24)</sup>。1970年代にも彼の活躍は続く。最大のヒット曲は1972年の「青いリンドウ (Blau blüht der Enzian)」。1977年からはZDFで13回にわたって「ハイノと歌おう (Sing mit Heino)」というテレビ番組が放映された。1979年まで続いたこの30分の歌番組では、「野ばら (Sah ein Knab' ein Röslein seh'n)」を初めとするドイツの有名なフォルクスリート (Volkslied) が歌われたのである<sup>(25)</sup>。ハイノは1960-70年代にはドイツのポピュラー音楽界のニッチ (当時まだジャンルとしては存在していなかったVtüm) に入り込んだのである。ただ、あるインタビューで「私は常に真のVMを歌ってきた。1988年に他の歌手たちがこの流れに飛び乗った時に、私は「リンドウ・ラップ」で別の方向性を試していたし、しかもそれで成功を取っていた<sup>(26)</sup>と述べているように、ハイノは自らの音楽はVMであると定義している。「1988年」というのは、先述の男性二人組、Original Naabtal DuoのVMグランプリ受賞曲「ババリアの女神 (Patrona Bavariae)」でVtümが急に脚光を浴び、このジャンルが広まった時期である。自分はそのようなブームに乗じた後発の歌い手とは一線を画して

いる、という矜持が読み取れる。何かと毀誉褒貶の多いハイノであるが、その自伝『ハイノ—それでも僕は愛されている (Heino. Und sie lieben mich doch)』にも同じような記述が見出せる。「私は常に VM を歌ってきた。これは Vtüm とは大きく異なるものである。VM で私が考えるのは、なによりもまず既に数百年も知られている真のフォルクスリートである。そのような歌を新しく登場してきた Vtüm の歌手は歌わない。(・・・) 私が自分の仲間と一緒に歌ってきたのは、Am Brunnen Vor dem Tore や Ahnchen Von Tharau のような実際に地域に根ざした音楽なのである。我々は古いアレンジを新しく現代的なものに変えているのだ。それに対し Vtüm は大抵は Schlager から製作されたものである」<sup>(27)</sup>。ハイノ本人は自らの音楽を一貫して VM と規定しているが、商業性を考えれば Vtüm に分類するのが妥当であろう。

ハイノ以外に Vtüm というジャンルが市民権を得る前にこの分野で活躍していたのは、「ヨーデルの王様」といわれたフランツ・ラング (Franz Lang, 1930- )。それにマリア & マルゴット・ヘルヴィッヒ (Maria Hellwig, 1920- 、Margott Herwig, 1941- ) の母娘である。母のマリア (後に二人) が司会を務めた Vtüm のテレビ番組には、「音楽がやって来る (Die Musik kommt)」(ZDF, 1973-1983)、「あてどない旅 (Die Fahrt ins Blaue)」(ZDF, 1978-1979)、「早期に鍛えよ (Früh übt sich)」(ZDF, 1979-1981)、「ハイマート・メロディー (Heimatmelodie)」(RTL, 1984-1994)<sup>(28)</sup>がある。ブームを迎える前に、こうして Vtüm 受容の下地は着実に作られていたのである。

### 2-3 フォルクスマジック・グランプリ (Grand Prix der Volksmusik)

このグランプリが始まったのは 1986 年で、当初はドイツ、オーストリア、スイスが参加していたが、2000 年から南チロルも参加するようになった。この大会は ORF (オーストリア国営放送)、ZDF (ドイツ第二テレビ)、SFDRS (スイス放送) と Rai Sender (ボーツェン) が共同で、娯楽音楽の進展を目的として始まったテレビ番組であるが、直接の発案者は、かつてウド・ユルゲンス (Udo Jürgens, 1934- )、アレクサンドラ (Alexandra, 1944-1969)、ハイノのマネージャーをし、現在はシュテファン・ムロス (Stefan Mross, 1975- )、シュテファニー・ヘルテル (Stefanie Hertel, 1979- )、フロリアン・ジルバーアイゼン (Florian Silbereisen, 1981- ) のマネージメントをしている Hans B. Beierlein である。4 つの地区予選を勝ち抜いてきた音楽家たちが本戦に出場し、視聴者の投票によって勝者が決定する。要するにこの大会は、1956 年から続いている世界最大の歌謡祭とも言われるユーロヴィジョン・ソング・コンテスト<sup>(29)</sup>のドイツ語圏の Vtüm 版である。優勝者が俄然注目され始めたのは 1988 年の Original Naabtal Duo のグランプリ曲「ババリアの女神 (Patrona Bavariae)」からである。「この歌は単なるヒット曲ではない。これは Vtüm 全体の先駆的な歌なのであり、このジャンルを広範なリスナーに知らしめ、そして近づきやすいものにしたのである。この曲とともに Vtüm のブームが始まったのだ」<sup>(30)</sup>。歴代のグランプリ受賞者には現在このジャンルを代表するアーティストが何人(組)もいる。Original Naabtal Duo (1988)、Stefan Mross (1989)、Kastelruther Spatzen (1990)、Stefanie Hertel (1992)、Klostertaler (1993)、Nockalm Quintett (2002)、die Ladiner (2004)。なかでも注目すべきは Stefanie Hertel と Stefan Mross であり、ともに 10 代でグランプリを受賞し、その後結婚。S・ヘルテルが旧東ドイツ出身、S・ムロスはバイエルンの出身で、東西ドイツの融合を体現したカップルと言えよう。二人とも同じマネージャー H.B.Beierlein の下で活動している。現在、グランプリ以外に

もこのジャンルには幾つもの賞が設けられている。このジャンルを対象としたものが「Edelweiß, 1991- 」であり、さらにこの分野の部門賞が設定されているのが「Goldene Stimmgabel, 1981- 」と「Schallplatten Echo, 1992- 」である。そして VM・Vtüm の分野で何らかの賞を獲得したアーティストが対象となるのが、1998 年に H. R. Beierlein の発案により創設された Krone der Volksmusik である。このような賞の飽和状態が企図しているのは、歌手に箔をつけさせて、それまで「ビアホールの臭気が色濃く付着していたこの音楽」<sup>(31)</sup>を上品なものに変えることであった<sup>(32)</sup>。

#### 2-4 旧東ドイツの音楽事情とドイツ統一

ドイツ統一後、Vtüm が以前にもまして人気を得たのは、上記のフォルクスマジック・グランプリの創設とともに、旧東ドイツの音楽事情も与っていた。ドイツ社会主義統一党 (SED) のポピュラー音楽に対する姿勢は時代とともに変化していったが、当初は専ら所謂 E-Musik (Ernste-Musik) と呼称されるクラシック音楽をその視野に置いていた。1953 年 6 月 17 日の大規模な反政府抗議デモ以降、党は娯楽の重要性を認めポピュラー音楽にも目を向けるようになり、ラジオ放送の 60% は音楽・娯楽番組とする決定を下した。東独の指導者達は、ポピュラー音楽を通して社会主義的イデオロギーの涵養を目指したのだが、それは同時に西側の退廃的なポピュラー音楽の防波堤となることも意図していた。そのため民衆 (Volk) のための音楽 (Volksmusik) は手厚く保護されていたのである。実際、国民が好んで聞いていたのは、ポップス、ロックと並んで、非政治的な甘い愛の歌やセンチメンタルな郷土の歌であった。非政治的な歌がいかに好まれていたかについては、東独時代、一番売れたアルバムレコードは、フランク・ショーベル (Frank Schöbel, 1942- ) の妻と一緒に吹き込んだクリスマスソング集「家族のクリスマス (Weihnachten in Familien)」であったことがその証左となるであろう<sup>(33)</sup>。そして郷土の歌で特に成功を取めたのが、旧東独で最も人気のあった VM 歌手兼作曲家のヘルベルト・ロート (Herbert Roth, 1926-1983) で、1951 年から 1983 年まで相方の女性ヴァルトラウト・シュルツ (Waltraud Schulz) と舞台に立っていた。彼が 1951 年に発表した「レンシュタイクの歌 (Rennsteiglied)」は、1997 年にはドイツで最も好まれている「ハイキングの歌」に選ばれ、その出身地チューリンゲン州の非公式の州歌とも言われている。彼は約 330 の歌を作曲したが、その内の 200 曲以上が VM の歌であり<sup>(34)</sup>、没後 25 年の 2007 年にも複数の音楽雑誌に彼の特殊記事が掲載されるほどであった<sup>(35)</sup>。「遠方への憧れ (Fernweh)」は 1950 年代以降の西ドイツの Schlager に通底するテーマであるが、これは東ドイツでも 1961 年のベルリンの壁の建設以降、「旅行 (Reisen)」と共に新しいテーマとして登場してくるようになった。1966 年には、ゲルト・ミヒャエリス合唱団が Vtüm の「遠方への旅 (Reisen, reisen in die weite Ferne)」で成功を取めたが、この歌の作曲はマティアス・ヴェント (Matthias Wendt) という芸名の前述のヘルベルト・ロートであった<sup>(36)</sup>。1960 年代末には、東ドイツの指導者達の、シュラーガーを通して影響を与えようという意図も薄まっていった<sup>(37)</sup>。1974 年からは「オーバーホーフの農民市 (Oberhofer Bauernmarkt)」というテレビ番組が始まった。統一後の 1991 年まで 99 回にわたって放映されたこの番組の常連は夫婦デュオのギッテ&クラウス (Gitte & Klaus) であったが、この番組は、東ドイツの VM の歌い手の登竜門という役割を担っていた。1992 年の VM グランプリ受賞者の S・ヘルテルはここでキャリアをスタートさせ、ガービ・アルブレヒト (Gabi Arbrecht, 1956- )

もこの番組で見出された一人である<sup>(38)</sup>。さらに旧東ドイツでこのジャンルで活躍していたのはハウフ&ヘンクラー (Hauff & Henkler, Moniak Hauff, 1944- , Klaus-Dieter Henkler, 1949-) の夫婦デュオであった。彼らは、「二人の音楽家が行く (Zieh'n zwei Musikanten, 1977-1979)」と「音楽家がやってきた (Musikanten sind da, 1981-1991)」という自分たちの番組を持ち、更に1978年以降は「Musikantenstadl」「Zum blauen Bock」「Musikladen」「Kein schöner Land」といった当時の西ドイツの関連番組にもゲスト出演している<sup>(39)</sup>。このような事情で旧東ドイツの人々は小さい時からVMやVtümMのサウンドには馴染みがあったのである<sup>(40)</sup>。さらにドイツ統一により、旧東ドイツの人々に、それまでレコードの入手が困難であった西ドイツのポピュラー音楽の掘り起しが行われ、これがVtümM人気の追い風になった。1989年9月11日、東西の境界線が開放されて数日の内に、周辺100キロメートル内では、先述のOriginal Naabtal Duoのレコードは完売となり、同年12月17日に東ドイツのコットブス (Cottbus) で行われた歌番組の「Musikantenstadl」は視聴率79%を記録。さらにハイノも初の東ドイツ公演で数万人のファンを集めたのである。更に例を挙げれば、1960年代後半、英語圏のビート音楽全盛の中、レコードを4千万枚以上売り上げ一躍世界的な子どもスターとなったのがハインティエ (Heintje, 1955-)。しかし声変わり後は以前ほどの活躍はできず歌手業から次第に離れていった。が、ベルリンの壁崩壊直前にハイン・ジモン (Hein Simon) としてカムバックをし、旧東ドイツで予期せぬほどの成果を収めたのである<sup>(41)</sup>。逆に、統一後しばらくは東ドイツのアーティストのレコードは旧東独では全く売れなかったという<sup>(42)</sup>。

### Ⅲ ドイツにおけるポピュラー音楽の受容

#### 3-1 音楽市場における受容

ドイツのポピュラー音楽を云々する際に押さえておかなければならないのは、ドイツ対国外 (インターナショナル) という対立構図である。この点を、トップ100におけるCDアルバム・CDシングルの国内盤、国外盤の割合から見てみたい<sup>(43)</sup>。表1は2000年から2007年までのアルバム国内盤、国外盤の割合を示したものである。国内盤アルバムは2000年の時点では国外盤の40%を占めるにすぎなかったが、それ以降、数値は一貫して上昇している<sup>(44)</sup>。一方、国外盤は2000年の48,7%をピークにその後は漸減。その結果2007年度に限って言えば国内盤は国外盤の約96%にまで接近している。

シングル盤の比較が表2である。ことシングルに関しては、国内盤と国外盤はいい勝負を繰り返していると言えよう。2001年にドイツ盤は35,5%と落ち込んだものの翌年から盛り返し、2003年から2006年まで国外盤を上回っている。2000年以降の過去8年間の両者の割合を平均すれば、国内盤対国外盤は47,7対52,3になる。2007年は1%下回ってしまったが、この数字はCDアルバムの場合と同様、国外盤の96%になる。従ってCDアルバムとシングルを合わせてみれば、ドイツ国内盤の割合は国外盤より若干少ないと言えるだろう。ただ2003年から国内盤シングルは好調ではあるが、全体的に見ればCDの国際盤の優位性は紛れもない事実である。



表1：トップ100内のCDアルバムの国内外の割合 (単位：%)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
国内盤	19,5	21,1	26,5	29,5	30,3	35,3	38,1	38,8
国外盤	48,7	47,9	44,8	46,6	44,8	42,4	43,1	40,6
C P	29,4	28,5	26,4	21,1	22,3	20,5	18,0	19,3
S T	2,4	2,6	2,4	2,7	2,6	1,9	0,9	1,2

(CP：コンピレーション、ST：サウンドトラック) media control のデータより作成

表2：トップ100内のCDシングル国内外の割合 (単位：%)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
国内盤	44,1	35,5	42,7	54,7	51,5	51,5	53,2	49,0
国外盤	55,9	64,5	57,3	45,3	48,5	48,6	46,8	51,0

media control のデータより作成

では、音楽ジャンルごとの売り上げはどうなっているのでしょうか。表3は、ドイツ音楽産業連盟による音楽総売り上げに占める個々のジャンルの割合を記したものである。ここでの総売り上げとはCDシングル・アルバムの売り上げである、が、2003年以降はミュージック・ビデオ (VHSとDVD) を含み、更に、2005年度からはダウンロードの料金も含まれている。尚、「その他」の内訳は、朗読本、児童音楽、カントリー・フォーク、映画音楽 (サウンドトラック)、クリスマス音楽、インストゥルメンタルであり、この表記の順番は2007年度のそれぞれの数値の高い順になっている。2002年から2007年まで常にトップの座を占めているのはポップスであるが、毎年数値は下がっており、過去5年間で9%減少している。逆に毎年上がっているのがロックであり、5年前と比較すると4,3%増となる。ポピュラー音楽の主流はこの表からも明らかなように、ポップスとロックで、2002年から2007年までの両者の合計の平均は56,6%となり、この二つで半数を超える事になる。それに続くのが、本稿で取り上げるシュラーガーであるが、二位のロックと比べても数値はその4割である。興味深いのは、Schlagerの値とクラシック音楽の数値がほとんど同じである点である (Schlagerの平均は7,8に対しクラシックは7,6)。VM (ここにはVtümも含まれている) は2007年が1,6%、最高でも2004年の2,2%と決して数値は高くない事が分かる。SchlagerとVMについて確認しておくべきは、年度ごとのその数値に変動があまりない点であろう。Schlagerは8%前後、VMは2%前後を推移しているのが分かる。

表3：ジャンル別割合（単位：％）

	2002	2003	2004	2005	2006	2007
ポップス	43,6	40,9	38,8	37,1	36,8	34,5
ロック	15,9	15,9	18,5	19,2	17,9	20,2
Schlager	7,2	8,5	7,6	6,8	8,3	8,2
VM	1,8	1,9	2,2	2,0	1,7	1,6
ジャズ	1,8	1,8	1,8	1,9	1,7	2,2
ダンス	6,2	6,6	5,6	5,3	4,7	4,0
クラシック	7,2	6,9	7,8	7,9	8,3	7,7
その他	16,3	17,5	17,7	19,8	20,6	21,6

2003年度以降ミュージックビデオ（VHS, DVD）を、2005年度以降ダウンロードを含む。

ドイツ音楽産業連盟のデータより作成

シュラーガーとVMの合計はロックの平均値（17,9％）と比べると、その54％、ポップスの平均値（39％）では、その25％となる。ドイツのポピュラー音楽に関して言えば最も人気があるのがポップス、次がロックで、この両方で半数以上を占めている。SchlagerとVMをあわせて10％弱、クラシックは7,8％となっている。それでは、各ジャンルの購買者の年齢層はどうなっているのだろうか？ この問いの答えが表4である。

表4：音楽市場に占める各年齢層の割合（単位：％）

	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上
人口割合07	12,1	13,0	15,0	18,5	41,4
音楽市場07	13,3	17,3	21,3	24,0	24,2
ポップス07	16,0	18,0	22,7	28,5	14,8
ロック07	19,5	23,6	22,6	23,8	10,5
SCH/VM07	6,5	8,4	14,6	20,6	49,9
ダンス07	28,7	37,3	14,7	15,9	3,4
クラシック07	2,8	3,0	9,1	17,8	67,4

2005年度以降はダウンロードを含み、2007年度はミュージックビデオ（VHS, DVD）を含む。

GfK Panal Service のデータより作成

「人口割合07」というのは2007年度における上記の年齢人口の総人口に占める割合である。「10～19歳」人口は2007年度では全体の12,1％を占めるが、音楽市場全体で見れば13,3％とそれほど高くはない。音楽の主たる購買層というと10～20代の若者と考えがちであるが、10～20代の人口比25,1％に対し音楽市場での割合は30,6％と、少なくともこの表を見る限り、この連想は正しくないと言えるのだが、この背景には、CDの違法コピーという音楽市場全体を揺るがす大きな問題が潜んでいる。ドイツ音楽産業同盟の2007年の報告によれば、合法的にダウンロードされた歌一曲に対し、違法コピーはおおよそ10曲の割合と言われている。

る<sup>(45)</sup>。最大の購買層を成しているのは人口の33,5%を占める20～30代で、市場全体では45,3%を占めている。この表では Schlager と VM が一緒に扱われているが、2-2 で記したように重なる部分はあるにせよ異なるジャンルである。が、シュピーゲル誌が音楽産業の VM を「民族衣装をまとったシュラーガー (Schlager in Trachten)」と形容したように<sup>(46)</sup>現在ではしばしば一括して扱われることもある。例えば雑誌「Meine Melodie」の表紙にはこのタイトルの下に副題として小さく「Magazin für Schlager & Volksmusik」と記されており、両者のファンを区別してはいないことを暗示している。この Schlager と VM であるが年齢が上がるにつれて受容が上昇するのは一目瞭然であり、購入者の最大のグループは50歳以上の中高年及びそれ以上の年齢層である。この事を裏書する例の一つ挙げておこう。それは、Vtüm 界のトップに位置する中年男性7人組の Kastelruther Spitzzen の CD の売り上げである。CD シングル・アルバムのヒット・リストを見てもこのバンドはシングルではなくアルバム盤が上位にランクされているのである<sup>(47)</sup>。音楽という余暇活動に対し、金銭的、時間的、そして精神的にも余裕を持っていると考えられる中高年であるからこそ CD アルバムを購入するのであろうと予想できる。ついでに言えば、この年齢上昇に比例した割合増加が更に顕著なのはクラシックである。Schlager、VM に話を戻せば、10、20代にも購買者は存在するという点を見落としてはなるまい。ポピュラー音楽関連記事を読むとしばしばこの種のジャンルへの嫌悪や憎悪を感じることもある<sup>(48)</sup>が、少数とは言え青少年層にも受容があることが分かる<sup>(49)</sup>。

### 3-2 テレビにおける受容

音楽市場における Vtüm や Schlager の売り上げはポップスやロックに比べるとそれほど大きくはない。が、これをもって両ジャンルの低調を結論付けるのは早計であり誤りである。実際、「シュラーガーの世紀」というサブタイトルのついた2008年刊行の『Melodien für Millionen (数百万人のためのメロディー)』にはこのような記述も見出せる。「フォルクスミュージックという名前のついた番組は公共放送のレパートリーとして定着している。F・ジルバーアイゼン (Florian Silbereisen) が司会者を務める番組は、20%を超える視聴率を獲得している。WDR(西部ドイツ放送)4とニーダーザクセン NDR(北ドイツ放送)1の「シュラーガー番組」は2007年度ドイツで最も視聴者の多かった番組であった<sup>(50)</sup>。このように現在 Vtüm はテレビ界では活況を呈しているといっても過言ではない。つまり、これらのジャンルの受容は CD の売り上げという物差しだけでは測れないのである。そしてこの CD 売り上げとテレビでの受容との乖離にこそまさに Schlager、そして特に Vtüm の受容の特殊性が潜んでいると言えよう。この特異性を探るべく、この分野の音楽番組に目を向けてみたい。「現在 VM と VM 関連の番組はインフレ気味<sup>(51)</sup>と称されるほど多い中で、Vtüm というスタイルとその人気を決定付けたといわれる「Musikantenstadl」を紹介してみたい。

#### 3-2-1 Musikantenstadl

「Stadl」というのは「Scheune (納屋)」の意味のオーストリア、バイエルン地方の方言である。この番組は1981年3月5日に始まり、最初はオーストリアだけで放送されていた。因みに初回のオープニングを飾ったのは、S・アフセニクの「トランペット・エコー」であり、現在でも番組の冒頭で用いられている。生放送になったのは1983年からで、翌1984年の2月18日からドイツとスイスでも放映されるようになった。それまで土曜の午後の放送であ

ったが、1986年からは20時15分開始というゴールデンタイムに移行している。毎回異なるドイツ語圏の町から放映されるこの番組は、主に音楽とトークから構成されており、音楽は当初、ドイツ語で歌われるVtümが専らであったが、次第にオペレッタやミュージカル、それにクラシック曲や英語の歌も取り上げるようになった。司会者のカール・モイク（Karl Moik, 1938-）は、その自伝の中で、1990年の番組史上初めて英語の歌を放送した事を「冒険的行為」<sup>(52)</sup>と記し、ドイツ語のVtümと英語圏の歌との対立の根深さを示している。歌のインターナショナル化と並行して、それまでドイツ語圏の町からの放送が主であったが、1985年の旧ユーゴスラビア（現スロベニア）のパトローシュ（Patrož）を皮切りに、海外にも出かけている。モスクワ（1988年）、トロント（1994年）、メルボルン（1995年）、ケープタウン（1996年）、オランダのディズニー・ワールド（1998年）、北京（1999年）、ドゥバイ（2001年）。この内、北京での公演は8億もの中国人がテレビ放送を見たといわれている<sup>(53)</sup>。海外公演で特筆すべきは、多くのファンが現地へ旅行を兼ねて駆けつけるという現象であり、1999年10月の北京公演の際には4500人以上のファンが大挙して20以上のジャンボに乗り込み駆けつけたと言われている<sup>(54)</sup>。番組のファンがいかに多く熱心であるは、現在2ヶ月ごとに番組の雑誌「Musikanten Stadtpost」が発行されていることから分かるであろう。2004年に出版されたこの番組の特集本には毎回、約100万人のオーストリア人、900万人のドイツ人、70万人のスイス人がこの番組を見ると記されている<sup>(55)</sup>。K・モイクは2005年で番組から退き、代わりに、シュラーガー歌手のアンディ・ボルク（Andy Borg, 1960-）が、2006年9月23日の145回目の放送から司会を担当している。このMusikantenstadl以外に人気のある番組には「陽気な音楽家達（Lusitige Musikanten）」<sup>(56)</sup>や「本国以上に美しい国はない（Kein schöner Land）」<sup>(57)</sup>がある。

Vtümやシュラーガー関連の番組で歌手やグループが歌を披露する際に日本では見かけない仕掛けがとられている。それは画面上の歌い手の背景（ドイツ語圏各地の風景、Vtümの場合には主としてアルプス地方の山岳風景）が歌が進むにつれ順次代わってゆくことである。歌詞と歌手の口の動きが一致しているのは言うまでもない。視聴者は曲を聴くと同時に美しい郷土の風景も堪能できる仕組みになっているのである。

### 3-3 祭り（フェスト）

ドイツやドイツ語圏の国々（スイス、オーストリア）では、地方主義の伝統を反映して一年中各種の祭り（フェスト）が行われており<sup>(58)</sup>、「祭りに関してはドイツが世界一」<sup>(59)</sup>と言われるほどである。宗教的なもの（例えば、謝肉祭、復活祭、精霊降臨祭、聖ヨハネ祭り、クリスマス等）以外では、四季折々の季節的なもの、地方独自の伝統・風土に根ざした民俗的な祭り、各種クラブの祭り等が挙げられる。季節祭では、マイバウムを立てて春の到来を祝う五月際、秋の収穫感謝祭が行われ、ビールやワインの産地ではビール祭り、ワイン祭りが開催される。世界最大の祭りはミュンヘンのオクトバーフェストであり、9月下旬の土曜日から10月最初の日曜までの16日間開催され、毎年6百万の来場者があるといわれている。ドイツ人が3人集まればクラブができると言われるようにドイツには多種多様なクラブがあるが、中でも歴史があるのが射撃クラブであり、各地で射撃祭が行われている。さらにドイツ各地で行われているのがキルメスと呼ばれる教会堂開基祭である。このキルメスは現在ではその地域独自の祭りとなっており、中には期間中に470万もの訪問客を集めるノルトライン・

ヴェストファーレン州のヘルネ (Herne) のクランガー・キルメス (Cranger Kirmes) のような大規模な祭り<sup>(60)</sup>も存在する。そしてこの様な祭りに欠かせないのが Vtüm や Schlager であり、それらを演奏する楽団なのである。「祭りには音楽がつき物であり、フォルクスチュームリヒの多くのバンドにとってはテント張りの祭りは最大の収入源となっている。・・・2006年には1億7800万以上の人々がドイツで行われた民間の祭りに出かけている」<sup>(61)</sup>。「ドイツのカーニヴァル、射撃祭、オクトパーフェスト以上に多種多様な音楽に触れ合うことができるのはどこにもない」<sup>(62)</sup>のであり、「フォルクスミュージックなしのミュンヘンのオクトパーフェスト、謝肉祭、キルメス、ワイン祭り、都市祭、射撃祭なんて考えられない」<sup>(63)</sup>のだ。つまり、ドイツ語圏では VM や Vtüm というのは決して特別なものではなく、触れる機会の多い身近な音楽なのである。

## IV なぜ人気があるのか？

### 4-1 gemütlich な空間

最後にこれらのジャンルはなぜ一定の熱心なファン層を獲得しえたのか、考察してみたい。多くの歌番組を見ているとある共通点に気がつく。注目すべきは、テレビ番組の装置、即ち、Vtüm が演奏され、歌われる際の舞台設定である。例として Musikantenstadl の舞台を取り上げてみよう。通常大きなホールで開催されるが、その規模に応じて幅 27m から最大 80m までの舞台が設えられる。中央には 納屋 (Stadl) をイメージさせる建物が作られ、屋根はこけら屋根、建物正面の横木にはトウモロコシが一行に吊るされている。暖炉が設置され、一角には麦わらを納めた囲い。セットの板塀やケーブルを覆い隠す無数の鉢植えの花と切花<sup>(64)</sup>。舞台の右手にはその主催地の市長席が設けられ、司会者はそこでゲストと歓談することになる。左手は楽団席。そして観客席にはテーブルと椅子が用意され、テーブル上にはビールやワイン、パン。観客の中には地元の祭りの際に着る民族衣装を纏っている人もいる。興に乗ればお決まりのシュンケルン (Schunkeln、腕を組みながら曲に合わせて体を左右に揺らす事)。要するに、歌い手と観客が渾然一体となっているのである。Musikantenstadl を「テレビ事典 (Das Fernseh Lexikon)」で調べると真っ先に「カール・モイクと VM の多彩なゲストによる土曜の夜の大掛かりなショー。歌が披露される間、観客はともに手をたたき、腕を組んで体を揺らしている」<sup>(65)</sup>というように歌い手と観客との親和的な関係が記されている。

ドイツ(人)の特性を論じる際にしばしば Gemütlichkeit (居心地のよさ、快適さ) が引き合いに出されるが<sup>(66)</sup>、英文学者のハンス・ディーター・ゲルフエルト (Hans-Dieter Gelfert) はドイツ語の gemütlich を特に英語の場合と比較しながら以下のように述べている。「英語の単語では通常、その意味を人間に関するものと事柄に関わるものとに分けている。ゲミュートリッヒ (gemütlich) な人は、sociable, genial, jovial や jolly と記され、ゲミュートリッヒ (gemütlich) な空間は cozy, comfortable, snug と記される。同様の分離はフランス語でもイタリア語でも認めることができる。しかしながら、ゲミュートリッヒカイト (Gemütlichkeit) というドイツ語の概念に固有なのは、それは人間と空間を融合すると言う点である。Gemütlich というのは、リラックスした人が緊張感のない内的空間と融合することなのである。この和合を生み出すことが、まさに Gemütlichkeit の産業と称せられるドイツの娯楽の目標なのだ。Volksmusik をふんだんに取り入れた家族向けの放送は、今日、テレビを通

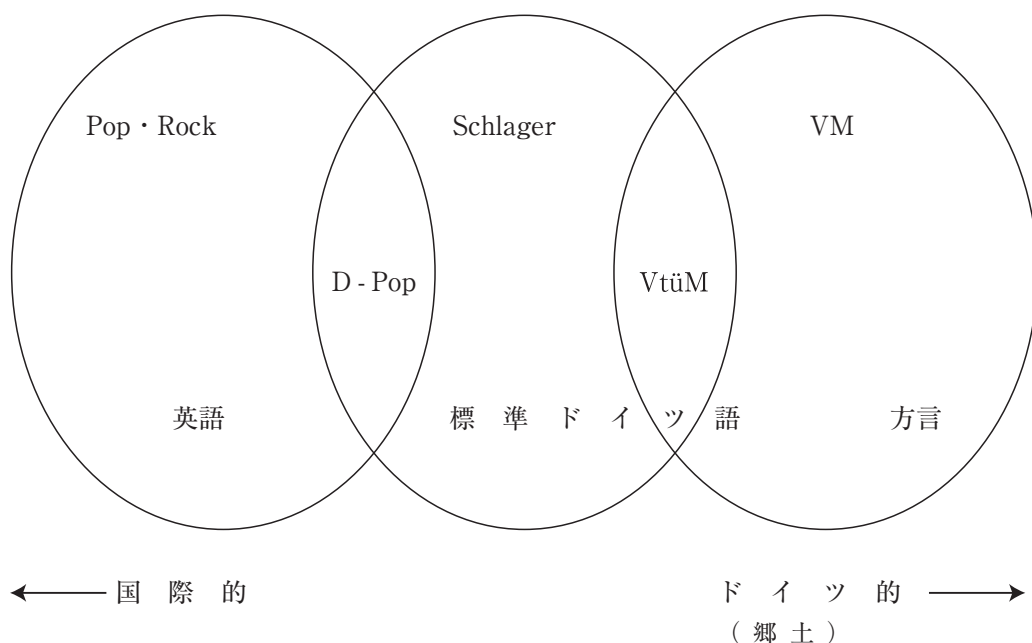
して、この作り出されたこの融合体を家庭内に運んでくるのである」<sup>(67)</sup>。つまり、Vtüm の番組の舞台というのは、観客に可能な限りゲミュートリッヒ (gemütlich) さを醸成する装置なのだ。実際、先述の Musikantenstadl の舞台は「『ゲミュートリッヒな部屋』と『大掛かりなショー舞台』の融合」を意図しているのであり<sup>(68)</sup>、この gemütlich さの一端に触れるために毎回多くの視聴者がテレビの前に座ることになるのである。

#### 4-2 反グローバリゼーション

前章に続いて Vtüm がなぜドイツ語圏でコアなファン層に支持されているのか、最後により大きな視野から眺めてみたい。経済の分野でグローバリゼーションという言葉を目にして久しいが、実はこれは、ドイツのポピュラー音楽界では 1960 年代中葉から起きていた現象であった。ドイツのポピュラー音楽の展開はグローバリゼーションとその反発という対立軸でとらえると分かりやすくなる。この時期までドイツでポピュラー音楽というとドイツ語で歌われる Schlager しか存在していなかった。1950 年代後半にアメリカで生まれたロックン・ロールがドイツにも輸入されたのだが、それは英語のままではなくドイツ語に直されて、しかも内容もオリジナルに備わっていた性的表現や社会批判性といった毒気を取り除かれて、いわばシュラーガー化されて受容されたのである。つまり、異質なロックン・ロールを内に取り込むだけの力が Schlager には備わっていた、別言すれば、若者の無軌道と同視されていたロックン・ロールを中和するほどに Schlager の支持層である保守の基盤がしっかりしていたのである。しかし、60 年代半ばビートルズの上陸によりこの状況は一変してしまった。ドイツのヒット・チャートの上位を英語の歌が独占するようになったのである。シュラーガー対英語のポップス・ロックという対立であり、これは同時にドイツ語対英語、ドイツ性対国際性、さらには保守対革新という世界観の対立にまで敷衍された。ビートルズに代表されるビート音楽が若者の生活文化を変えてゆくにつれ、Schlager には後進性というレッテルが貼られ若者層は離れていった。それまで年齢に関係なく幅広く受容されていた Schlager は若者世代を丸ごと失っていった。ここに現在にまで続いている英語圏のポピュラー音楽の優位性 (3-1) が始まったのである。その後、Schlager は 1970 年代に、時代の流行を身に着けた若い歌手が多数登場し、名物番組の「ZDF ヒットパレード」の人気<sup>(69)</sup>とあいまって一時、盛り返したが、1980 年代にはまた低空飛行を余儀なくされる。1980 年代初頭には、Neue Deutsche Welle という英語圏のメインストリームからは外れたドイツ独自のムーブメントが起こった。1970 年代後半にイギリスで起こったパンク・ニューウエーブの流れを汲むもので、若い世代がこれまでのように英語ではなくドイツ語で、しかも、本来誰も傷つけることのない Schlager では扱われなかったアクチュアルな話題（「恋するコンピューター」「氷河期」「国民総生産」「ミュンヘンの売春宿」等）を軽快な曲にのせて歌った。が、この潮流も程なく枯渇し、80 年代半ば以降は以前にもまして英語圏のポップス・ロックが優勢となり、ドイツ語のポピュラー音楽はまたもや低迷期に突入する。この長いトンネルの中、しかし Musikantenstadl 等の人気テレビ番組でこのジャンルの下地が作られ、1986 年の VM グランプリの創設とグランプリ曲「Patrona Bavariae」の大ヒットにより、これまで単発的な成功だけであった Vtüm が、一つのジャンルに収斂していったのである。これは、英語圏のポップス・ロックの優勢というグローバリゼーションに対するドイツ性からのアンティ・テーゼであった。グローバリゼーションの波が強くなればなるほど、保守的なこのジャンルは一層硬化する。1960 年代半ばから

保守化していた Schlager であるが、その中でもドイツ的で保守性の度合いの強い Vtüm が、ポップスやロックといった外国の影響を受けていないドイツ語圏の VM の要素を取り入れながら、この状況下で登場してきたのである (図 5 参照)。Vtüm は郷土性を土台としたドイツポピュラー音楽最後の砦である。「このジャンルの特徴は閉鎖性である。独自の雑誌、ラジオ放送、テレビ番組を備えたマイクロコスモスを形成しており、ポップカルチャーとの接点はほとんどない」<sup>(70)</sup>。既に触れたように、テレビ番組 Musikantenstadl が 1990 年まで、ドイツ語の歌だけを取り上げていたのもこのグローバル化に対する閉鎖性の現れである。同時に、この対峙には世代間の対立と言う構図も見え隠れする。既に確認したようにシュラーガーと Vtüm の受容者は中高年以上が中心であり、ポップ・ロックの場合は若者が主流となっている。このような二種の対立軸の中に納まっている限り Vtüm は、大きな発展は望むべくもないが、今後も安泰であるのは確かであろう。「テンポの速いポップシーンとは異なり、この業界は狭く、ほとんど家族的で安定している」<sup>(71)</sup>のである。とはいえ、このジャンルでも変化は確実に起きている<sup>(72)</sup>。おそらく中核の部分は残し周縁では他ジャンルの要素を受け入れて絶えずジャンルの外周を変化させてゆくに違いない。

図 5 VM, Vtüm, Schlager, Pop・Rock の関係性



## V 最後に

現在、Vtüm はポピュラー音楽分野で確固たる地歩を占めている。高齢化社会のニーズに合致し、中高年及びそれ以上が限定的とはいえ主たるファン層を成しており、その分熱心な支持層となっている。本稿ではポピュラー音楽を扱ってきたのだが、作曲やサウンド面での

音楽分析には踏み込んでいない。これは筆者のこの方面の無理解に拠るものであるが、Vtümはむしろ音楽以外の分野を含めた考察が重要なものであり、それだけドイツ語圏の人々の伝統、文化、日常生活に密接に結びついた音楽と言えるのである。

#### 注

- (1) 本稿ではドイツの戦後のポピュラー音楽史については詳しくは触れていない。これに関しては以下の拙論を参照されたい。押野洋「ドイツの Schlager の国際性と国民性」『ドイツ語圏のポップカルチャーの国際性と国民性』ドイツポップカルチャー研究会編 日本独文学会研究叢書 014 2002年 3-16ページ
- (2) 筆者は以前、ドイツのシュラーガーを細分化する際に Volkstümlicher Schlager を苦し紛れに「フォークロア・シュラーガー」と訳したことがある（『現代ドイツ情報ハンドブック』三修社 2000年 初版 82ページ）。が、Volkstümliche Musik となると「フォークロア音楽」とは訳出できない。「フォークロア」とは日本では「民間伝承」「民俗学」の謂いだからである。volkstümlich とはドゥーデン (Duden) に拠れば「民衆の思考や感情に沿った(が故に人気のある)」という意味であり、日本語で言えば「大衆的な、庶民に好まれる、人気のある」という訳語に相当するであろう。そうであれば「大衆音楽」という訳が適切と思われるが、本稿でも触れる様に、このジャンルの受容は限定的であり「大衆」的とは言えない。この問題は別の機会に検討してみたい。尚、この Volkstümliche Musik という用語であるが、「最も人気のあった、シュタイアーマルクのラジオの伝説的人物のペーター・ギルン (Peter Girn) が、60年代初頭、Kern-Buamの「僕と一緒に故郷へ飛んでゆこう (Fliege mit mir in die Heimat)」を Volkstümliche Musik と称したことによって初めてラジオで使った」と言われている。Jess Robin: Stars und Legenden der österreichischen Unterhaltungsmusik. Graz (Styria) 1999, S.9
- (3) それぞれ一例ずつ挙げておく。1983年から年一回放映されているカロリン・ライバー (Carolin Reiber, 1940-) 司会の「Die Super-Hitparade der Volksmusik (フォルクスムジックのスーパーヒットパレード)」は VM という用語が用いられているが扱われているのは Vtüm である。雑誌では「Stars und Melodien für Volksmusik-und Schlagerfreunde (フォルクスムジックとシュラーガーファンのためのスターとメロディー)」。CDでは「Das Goldene ABC der Volksmusik (フォルクスムジックの黄金のABC)」に収められている 40曲は全て商業的な Vtüm である。
- (4) 筆者が一年間滞在研究をしていた DVA (Deutsches Volkslied Archiv) のバルバラ・ボック (Barbara Book) 女史はこの「echte, wahre Volksmusik」という名称には反対であった。それは、「echte (wahre) Volksmusik」という呼び名は必然的に「unechte (unwahre) Volksmusik 偽りのフォルクスムジック」の存在を前提としているからである。そんなものは存在しない、という理由であった。
- (5) Brockhaus Riemann, Musiklexikon R-Z. Mainz, 1995, S.324
- (6) Lexikon Pop. Hrsg.v. Peter Höhne, Jürgen Sauer mann, Siegfried Schmidt-Joos. Wiesbaden (Breitkopf & Härtel) 1977, S.162
- (7) Jess Robin, a. a. O., S.9
- (8) 方言が標準語かで両ジャンルにはっきりと境界線を引く事はできない。Vtüm であっても方言で歌われることもある。歌は標準語でも、それ以外の場面では方言というケースもある。例えば Vtüm で現在最も人気を博しているハンジィ・ヒンターゼーア (Hansi Hinterser, 1954-) は歌う時には標準語だが、自身の番組の司会ではオーストリアのキッツビュール方言を用いている。彼のファンによれば「標準語を話すハンジィは、紙コップに入れた繊細なイタリアの赤ワインのようなもの」とのことである。Eva Mang: Die grosse Geschichte seines Erfolgs. Der Mensch hinter dem Star. Innsbruck (KOCH) 2008, S.71
- (9) <http://www.volksmusik.cc/volkstuemlich.htm>
- (10) 田辺秀樹「第2章 ドイツの芸術・文化音楽 (1)」『現代ドイツ情報ハンドブック (改訂版)』在間進・河合節子・山川和彦編 三修社 2003年 77ページ
- (11) Hartmut Braun: Volksmusik. Kassel (Bosse Verlag) 1999, S.119
- (12) Peter Wicke, Wieland & Kai-Erik Ziegenrucker: Hnadbuch der populären Musik. Mainz (Schott) 2007, S.794
- (13) Horst Grewer, Michael Thürnau: Das grosse Lexikon der Volksmusik. Kiel (Michael Jung) 1996, S.204



- (14) Das große Lexikon der Musik. Hrsg. v. Marc Honegger und Günther Massenkeil. Freiburg (Herder) 1982 S.249
- (15) Hans-Dieter Gelfert: Was ist deutsch? Wie die Deutschen wurden was sie sind. München (C. H. Beck) 2005, S.61-62 「思考の深みは今日も尚、ドイツの哲学者にとって非常に、もしかすると最高に価値のあることかもしれない。イギリスで高く評価されるバートランド・ラッセルやカール・ポPPERのような明晰な思想家はドイツの大半の思想家からは浅薄と感ぜられてきたし、現在もそうである」。 (S.62)
- (16) Mechthild von Schoenebeck: 「Dort wo, die Blumen blüh'n」 Heimat. In: Melodien für Millionen. Das Jahrhundert des Schlagers. Hrsg. v. Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland. Leipzig (Kleber) 2008, S.130
- (17) Das grosse Textbuch der Kastelruther Spatzen. München (KOCH) 2000, S.220
- (18) Das Lexikon des deutschen Schlagers. Hrsg. v. Matthias Bardong, Hermann Demmler und Chrisitan Pfarr. Mainz (B. Schott's Söhne) 1993  
Roland Wohlfart und Harald Letfuß: Das Lexikon der volkstümlichen Musik. München (TR-Verlagsunion) 1999
- (19) 「Die Zillertaler」 「Zillertaler Gipfelstürmer」 「Zillertaler Haderlumpen」 「Die jungen Zillertaler」
- (20) Claudia Gerdes: Die Deutschen im Verein. In: 100 Deutsche Jahre. Hrsg. v. Thomas Fischer, Rainer Wirtz. München (Chronik Verlag) 1998, S.302
- (21) このあたりの記述は G・Fischer の伝記に拠っている。Roger Orlik: Gotthilf Fischer. Meine Straße des Lebens. Albstadt (SP Verlag) 2003
- (22) 2008 年の夏、ドイツ滞在中に ZDF でこのグランプリを見ることができた。意外だったのは、ドイツ語よりも英語で歌う合唱団が多かった点である。英語であれば Vtüm に組み入れることはできないのだが、合唱だからといって単純に VM や Vtüm に関連付けるべきではない。むしろそのような枠を超えたところに合唱の進むべき道はあるのだろう。
- (23) <http://www.saengerbunde.de> - Deutscher Chorverband e.V.
- (24) Mechthild von Schoenebeck: Heino 「Stimme der Heimat」 In: Melodien für Millionen. S.133
- (25) Michael Reufsteck, Stefan Niggemeier: Das Fernseh Lexikon. München (Wilhelm Goldmann) 2005, S.1102
- (26) Roy Black. Unvergessen. Hrsg. v. Dieter Moll. Wintermühlenhof (HEEL Verlag) 1997, S.74
- (27) Heino: Und sie lieben mich doch. Die Autobiografie. Bergisch Gladbach (Bastei-Verlag) 1995, S.277
- (28) Michael Reufsteck, Stefan Niggemeier, a. a. O., S.357, 422, 838
- (29) ユーロヴィジョン・ソング・コンテスト 2006 年大会は 5 月 20 日にドイツ第一テレビ (ARD) で 9 時から 12 時までライブで放送された。本選出場の 24 カ国は 2 時間でそれぞれの楽曲を披露する。その後 10 分間の休憩があり、この間に視聴者の電話投票が行われるのだが、自国の代表に投票することは禁じられている。投票は国ごとに集計され、一位から順にそれぞれ 12 点、10 点、8 点、7～1 点と点数化され、この後 1 時間かけてヨーロッパの 38 カ国が順に自国の点数を発表してゆくことになる。が、この各国の投票結果を見て感じたのは、この大会は純粋に歌とパフォーマンスを審査する歌謡祭というよりもヨーロッパの多様な民族・国民のナショナリズムの発露という様相を呈している、ということであった。例えばドイツで最高点の 12 点を獲得したのは、ドイツ国内の最大の外国人グループであるトルコであり、旧ユーゴスラビアの国々がかつての同胞に高得点を与えていたのである。優勝はフィンランドで、ドイツは 15 位。筆者が投票したボスニア・ヘルツェゴビナは 3 位であった。
- (30) Roland Wohlfart, Harald Letfuß, a. a. O., S.146
- (31) Eva Mang: Das große Stadl-Buch. Amstetten (Verlag 66) 2004, S.9
- (32) 本論でも度々言及される Vtüm プームの仕掛け人 H・R・Beierlein はあるインタビューで語っている。「VM は私の考案ではない。もし私とそのポピュラー化に貢献したとすれば、それは VM を上品なものにしたということである」。  
Irving Wolther: 「Instinkt und Fingerspitzengefühl」 Interview mit Hans. R. Beierlein. In: Melodien für Millionen. S.62
- (33) Annette Wilczek: 「Was willst Du denn in Rio」 Interpreten und Themen des DDR-Schlagers. In:

- Melodien für Millionen. S.121
- (34) Siegfried Trzöß: Schlager-Geschichte(n) des Ostens. Bd. 2. 1965–1970 Berlin (aperçu Verlag) 2007, S.135
- (35) Meine Melodie. Nr. 2, 2007, S.41. Alpen Star. Nr. 2, 2007, S.37
- (36) Annette Wilczek, a. a. O., S.118
- (37) Annette Wilczek, a. a. O., S.116
- (38) Siegfried Trzöß: Schlager-Geschichte(n) des Ostens. Bd.3. 1970-1990. S.26
- (39) Siegfried Trzöß, a. a. O., S.112
- (40) Thommi Herrwerth: Katzeklo & Caprifischer. Die deutschen Hits aus 50 Jahren. Berlin (Rütten & Loening) 1998, S.158,159
- (41) Tommi Herrwerth, a. a. O., S.158
- (42) Jürgen Seibold: Schön ist es, auf der Welt zu sein. München (Wilhelm Heyne Verlag) 1998, S.85
- (43) 以下の表1～表4は全てドイツ音楽産業連盟のホームページ上に公開されているドイツ音楽産業の年次報告に拠っている。  
[http://www.musikindustrie.de/uploads/media/ms\\_branchendaten\\_jahreswirtschaftsbericht\\_2007\\_02.pdf](http://www.musikindustrie.de/uploads/media/ms_branchendaten_jahreswirtschaftsbericht_2007_02.pdf)
- (44) 国内（ドイツ）vs 国外（インターナショナル）という対決はドイツ語 vs 英語という二項対立に置換できる。2008年出版の最も新しいと思われる現代ドイツ・ポップ音楽を扱った本「Jetzt und wir」でも、この対立軸が、一貫して著者の最大の関心事である。日本の場合と異なり、ドイツのポップス・ロックのアーティスト、バンドには表現手段としてドイツ語ではなく英語を用いるケースが多い。中には element of clime のようにアルバムによって英語とドイツ語を器用に使い分けている場合もある。多くの音楽関係者がこのドイツ語対英語、ドイツ性対国際性、更にはドイツ語に内在する問題性に言及している。二例を挙げてみる。一人は1970年代のシュラーガーの名物番組「ZDF ヒットパレード」の司会者で現在もこの分野の重鎮である、ディーター・トーマス・ヘック (Dieter Thomas Heck, 1937–)。「フランスでもイタリアでもイギリスでも自国のポピュラー音楽は大切に育まれている。が、ドイツでは自国で作成されるものは多くの場合疑いの目で見られる」。もう一つは、1970年代に活躍した陽気なハッピー・ソングの第一人者トニー・マーシャル (Tony Marshall, 1938–)。「我々の国には奇妙な風潮がある。ドイツ語で、しかもちょっとばかり陽気な歌を歌うとそれだけで右寄りと思われられる」。
- Thorsten Schatz, Michael Fuchs-Gamböck; Jetzt und Wir. München 2008  
 Dieter Thomas Heck: Der Ton macht die Musik. Erinnerung. München (Universitas Verlag) 1988, S.182  
 Tony Marshall: Einer wie du. Der Sänger. Der Entertainer. Der Mensch. Rosengarten 1996, S.252
- (45) 「全てのコピーが違法という訳ではないが、全コピーの10～20%でも正規に販売されていたとしたら、音楽産業の総売り上げは6億から倍の12億ユーロはアップしていたであろう」と言う指摘もなされている。注(43)参照。
- (46) Der Spiegel. Nr.44, 2006, S.136–138
- (47) Frank Laufenberg: Hit-Lexikon des Rock & Pop. H–R. Berlin (Ullstein) 2007, S. 1171
- (48) 注(44)で言及した「Jetzt und wir」の中でもシュラーガー、VM蔑視は散見できる。両者に関する記述で使われている形容詞をいくつか拾ってみれば、「harmlos (他愛のない)」、「keusch (汚れない)」、「peinlich (気まずい)」といった否定的なものばかりである。この書はこの数年、流行現象となっているドイツ語のポップス、ロックへのオマージュである。ポップス、ロックはこの本に記されているように「いつも先ずもって若者文化の音楽的表現」であるなら、中高年が主たるファン層を成すシュラーガー、VMが目撃されるのも分からぬではない。
- (49) これは筆者のコンサートでの体験とも一致する。フライブルク滞在中の2007年1月24日、市内のメッセホールでカステルルター・シュパッツェンのコンサートに行ったのだが、聴衆は中高年や老年がメインというのは予想していたが、観客の中に子どもや若者を結構見かけたのは意外であった。
- (50) Hanno Sowade: 「Mein Herz müßte ein Rundfunksender sein」 Technischer Fortschritt und die Ware Schlager. In: Melodien für Millionen. S.31
- (51) Christian Bruhn: Marmor, Stein und Liebeskummer. Meine Welt ist die Musik. Berlin, (Schwarzkopf & Schwarzkopf) 2005, S.229

- (52) Uschi von Grundzinski: Karl Moik. Ich habe nichts geschenkt bekommen. Bad Sauerbrunn (Tau & Tau Type) 1997, S.150
- (53) Eva Mang: Das große Stadl-Buch. Amstetten (Verlag 66) 2004, S.109
- (54) <http://www.volksmusik.de/musikantenstadl/verteilerneu1.htm>
- (55) Eva Mang, a. a. O., S.117
- (56) 1971年からZDFで放送されているVMとSchlagerの番組。1978年からカロリン・ライバー (Carolin Reiber) が司会。3, 4ヵ月ごとに放送され1983年まで続く。9年のブランクの後、1993年より夫婦のマリアンネとミヒャエル (Marianne & Michael) の司会で再開。1999年より名称が「Lustige Musikanten on tour」に代わる。毎回、ドイツ語圏の町中から放送される。Michael Reufsteck, Stefan Niggemeier, a. a. O., S.738
- (57) 1989年スタートのギュンター・ヴェーヴェル (Günther Wewel, 1934-) 司会の45分番組。毎回、ドイツを含むヨーロッパの町から地元の風景、文化、音楽、さらにVolksliedやクラシック曲まで紹介。2003年以降は夏の期間だけ月一回放映される、ARD (ドイツ第一テレビ) の番組。Michael Reufsteck, Stefan Niggemeier, a. a. O., S.642
- (58) ドイツ語圏の祭りに関しては以下を参照した。松永美穂「第5章 祭り」『世界の歴史と文化 ドイツ』池内紀編 新潮社 1992年 339-349ページ、松永美穂「キリスト教・伝説・音楽が核 (コア)」『現代ドイツ情報ハンドブック (改訂版)』在間進・河合節子・山川和彦編 三修社 2003年 62-71ページ
- (59) Irving Wolther: 「Instinkt und Fingerspitzengefühl」 Interview mit Hans R. Beierlein. In: Melodien für Millionen. S.61
- (60) ドイツの祭り (フェスト) 関連サイトに拠れば、期間中に100万以上を集客する大規模の祭りは28ある。<http://www.wikipedia.org/wiki/Volksfest>
- (61) Wolfgang Moser: Die große Krise bei den Volksfesten. In: Alpen Star. Nr.8 2007, S.10
- (62) Die Stimmungsmacherin. Blasmusik. In: Das Beste an Deutschland. Hrsg. v. Florian Langenscheidt. Augsburg (Weltbild) 2006, S.408
- (63) Irving Wolther, a. a. O., S.61,62
- (64) Eva Mang, a. a. O., S.118, 119
- (65) Michael Reufsteck, Stefan Niggemeier, a. a. O., S.839
- (66) Hermann Bausinger: Typisch deutsch. Wie deutsch sind die Deutschen? München (C. H. Beck) 2000, S.62
- (67) Hans-Dieter Gelfert, a. a. O., S.26
- (68) Eva Mang, a. a. O., S.29
- (69) 1969年から2000年まで367回、放送されたSchlager番組。D. T. Heckは1984年12月まで司会を担当。特に1970年代前半、フレッシュな若い歌手が多数登場し大成功を取めた。例えば、レックス・ギルド (Rex Gildo, 1939-1999), ミヒャエル・ホルム (Michael Holm, 1943-), カーチャ・エブシュタイン (Katja Ebstein, 1945-), クリス・ロバーツ (Chris Roberts, 1946-), ハワード・カーペンデール (Howard Carpendale, 1946-), ベルント・クリューヴァー (Bernd Clüver, 1948-), ペーター・マファイ (Peter Maffay, 1949-), マリアンネ・ローゼンベルク (Marianne Rosenberg, 1955-) 等。
- (70) Der Spiegel. Nr.44, 2006, S.138
- (71) Der Spiegel. Nr.44, 2006, S.137
- (72) シュルツェンイエーガー (Schürzenjäger) が始めたVtümにロックを取り入れたアルペン・ロック (Aplenrock) も今では当たり前を受容されているし、Vtüm界の鴛鴦夫婦マリアンネ&ミヒャエル (Marianne & Michael) の「Germany is' schee」ではタイトルに英語 (Germany) と標準ドイツ語 (is'), さらには方言 (schee) が混存している。

(本稿は平成18年度二松学舎大学海外特別研究の成果としてここに公表するものである)。